大分県文化財調査報告書　第 146 輯

県道鶴崎大南線道路改良工事関係に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

久保田遺跡

2002

大分県教育委員会

久保田遺跡遠景（東から）

久保田遺跡遠景（南から）

久保田遺跡遠景　Ⅰ区空撮

SE3

SE3発掘状況

Ⅱ区空撮

Ⅲ区空撮

Ⅲ区近景

Ⅳ区空撮

ＳＥ３出土　風炉

ＳＥ３出土　備前水指

ＳＥ３出土　火鉢

序　　文

県道鶴崎大南線の建設は、一般国道１０号線の交通渋滞の解消と道路網整備を図るために計画されました。大分市東部と県南地区を結ぶ機関道路の一部として本県の産業・経済発展に役立つとともに、２００２年ＦＩＦＡワールドカップ大会開催時の混雑解消に貢献するものと期待されています。

大分県教育委員会では、この道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を平成１２年度に実施致しましたが、久保田遺跡では室町時代を主とする建物跡群を発見、調査しました。この調査成果を公にするため、ここに発掘調査報告書を刊行いたしました。本報告書が郷土史の研究及び埋蔵文化財に対する理解のために役立つよう願ってやみません。

終わりに、調査に御協力いただきました関係各位、地元の方々に対し心から感謝と御礼を申し上げます。

平成１４年３月２９日

大分県教育委員会
教育長　石　川　公　一

例　　言

1　本書は大分県大分市大字毛井字久保田所在の久保田遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、大分県教育委員会が県道鶴崎大南線道路改良工事に伴って大分県土木建築部企画検査室・大分土木事務所との協議の結果実施した。

3　調査にあたり遺構の実測・写真撮影等は調査員が行った。

4　図の方位はすべて真北である。

5　遺物の洗浄・接合・復元作業は文化課文化財資料室で行った。

6　遺物・図面・写真類は文化財資料室に保管している。

7　遺物の実測は大部分、遠部慎（文化課発掘調査一般事業担当嘱託）が担当した。

8　遺物の写真は友岡信彦（文化課発掘調査資料管理担当主査）・山崎文子（同嘱託）・遠部慎が担当した。

9　本書の編集・執筆は高橋信武が担当した。

目　　次

巻頭写真
序文
例言
第Ⅰ章　はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査体制 …… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
　1　遺跡の立地 …… 1
　2　歴史的環境 …… 1
第Ⅲ章　遺跡の概要 …… 4
第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 7
第Ⅴ章　まとめ …… 38
抄録

久保田遺跡位置図

第Ⅰ章　はじめに

1　調査に至る経緯

大分市東部地区の毛井・松岡地区では２００２年ＦＩＦＡワールドカップサッカー大会会場となる大分スポーツ公園ビッグアイが所在し、予想される交通渋滞の解消対策が急がれている。県道鶴崎大南線の道路工事は２０００年から開始され、大分県教育委員会もそれに対応して年度毎に工事予定地内の必要な箇所について試掘・確認調査を実施してきた。昨年度は今回本調査を実施した地区の南北両側の水田として利用されている低地部分の試掘調査を行った結果、沖積層を検出したのみで埋蔵文化財は未確認であった。今年度は地形的に若干高い現集落の広がる丘陵上面が工事対象地であり、現道を東側に拡幅するための用地買収が完了し既存建物類の撤去が終了後に試掘調査を行ったところ、清水川南側地区の微高地で埋蔵文化財を確認した。

試掘調査の結果を受けて大分県教育委員会は県土木建築部企画検査室・大分土木事務所と協議し、若干の準備期間をおいた後、引き続き本調査を行うことになった。

発掘調査は２００１年８月２２日から同年１０月３１日まで行った。

2　調査体制

久保田遺跡の調査は以下の体制で実施した。

調査主体	大分県教育委員会	
調査組織	山本芳直	（県文化課長）
	伊藤正行	（文化課参事兼課長補佐）
	清水宗昭	（　　同　　）
調査担当	高橋信武	（　同　副主幹　）
	平野真由美	（　同　嘱託　）

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

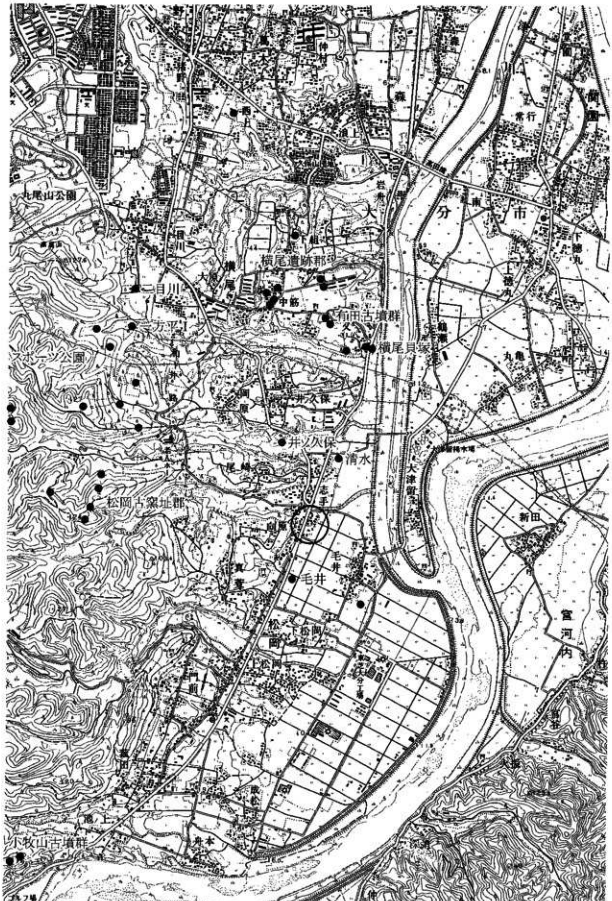
1　遺跡の立地

久保田遺跡は大分県大分市大字毛井字久保田にある。九州内陸部の阿蘇山東部から流れてくる大野川が別府湾に注ぐ下流域左岸に位置し、遺跡の標高は遺構検出面で標高１０ｍ前後である。大野川下流域の地形の基盤は１００数十万年前以降に成立した水性堆積層である。後に自然の作用によってそれが削られ、埋められ、現在見るようないくつもの段丘が残されたものである。段丘最上面は標高１２０ｍ前後で、平坦面が残っているように見えるが戦後重機による開墾がなされたためのようである。最近まで荒涼とした開拓地といった雰囲気を漂わせた場所であった。久保田遺跡は水田面からは１ｍ～２ｍの高度差をもつだけの最も低い段丘面に立地する。背後には西へいくに従って高くなる段丘面がつづき、前面には大野川までの間、水田地帯が広がる。調査地点の堆積層は表土下に一部で最大３０㎝程度の火山灰層がみられるが、その下は軽石質砂層・含礫砂質シルト層・シルト層・円礫を主とする粗粒層などを中心に形成されている。

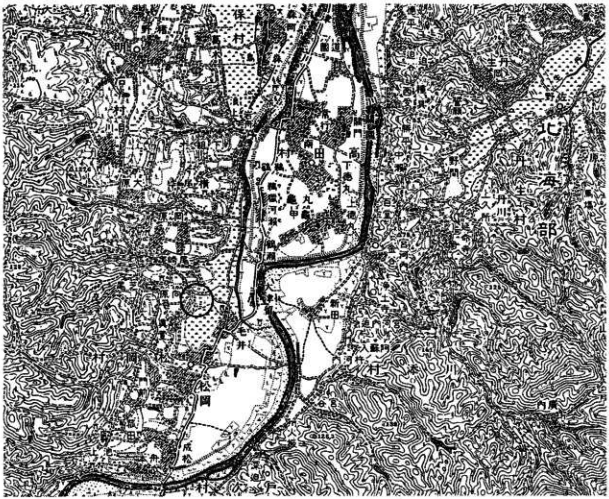
2　歴史的環境

久保田遺跡周辺の歴史的環境について触れておきたい。

旧石器時代　スポーツ公園建設に伴う発掘調査で標高　０ｍ～５０ｍ前後の段丘面が調査された



第１図　久保田遺跡と周辺の遺跡（国土地理院 1／2.5万「鶴崎」）



第２図　明治時代の久保田遺跡周辺（1901年）

結果、沢山の旧石器時代遺跡の存在が明らかとなった。一方平Ⅰ遺跡・一方平Ⅱ遺跡・一方平Ⅳ遺跡・九池遺跡・牧ノ内遺跡等である。特に一方平Ⅰ遺跡の調査では、石器の材料となる流紋岩は基盤の水性堆積層に含まれる円礫が使われていたらしいことがわかり、流紋岩製石器の石材の供給源について見直されることとなった。

縄文時代　草創期の遺跡は見つかっていない。早期は標高５ｍ以下の低地部に横尾遺跡があり、植物製手提げ袋や建築部材らしい木材が出土している。一方平Ⅲ遺跡・同Ⅳ遺跡は丘陵上の遺跡である。九池遺跡では円い平面形の陥し穴の調査例がある。旧石器時代か縄文時代のものであろう。前期・中期・後期は横尾遺跡に貝塚が残された。ここでは晩期の遺物も出土している。一方平Ⅳ遺跡では小川に面した谷底そばの狭い斜面に晩期末から弥生中期の遺跡が調査された。水稲耕作が始まったとされる時期であるにもかかわらず、農耕具は認められない。

弥生時代　清水遺跡で竪穴住居跡が検出されたほか、一方平Ⅳ遺跡以外目立ったものがない。

古墳時代　古墳時代の竪穴住居跡が低地にある清水遺跡・毛井遺跡で出土し、現在の集落立地と同じになる。小牧山古墳群はこの地域唯一の墳丘をもつもので、地域の首長一族の墓地であろう。

古代　久保田遺跡の南方約１ｋｍの松岡の平坦な丘陵面は海部郡の丹生駅想定地だが、未調査である。８世紀中頃に操業した松岡古窯址群は豊後唯一の須恵器を焼いた遺跡で、豊後国府直轄の工房であろう。井ノ久保遺跡・尾崎遺跡からは土師器焼成遺構が発見され、北方の横尾遺跡群では粘土採掘坑が多数検出されている。上牧ノ内Ⅰ遺跡では９世紀の灯明皿が数百個密集出土した。大野川と大分川に挟まれた地域の東部には、この他にも役所的な遺跡が多いという特徴がある。

中世　　鎌倉時代の嘉碇２（１２３６）年、信濃国御家人平林四郎頼守が承久の変の軍功により毛井社地頭職に補任され、以後室町時代を通じて平林氏の領地であった。

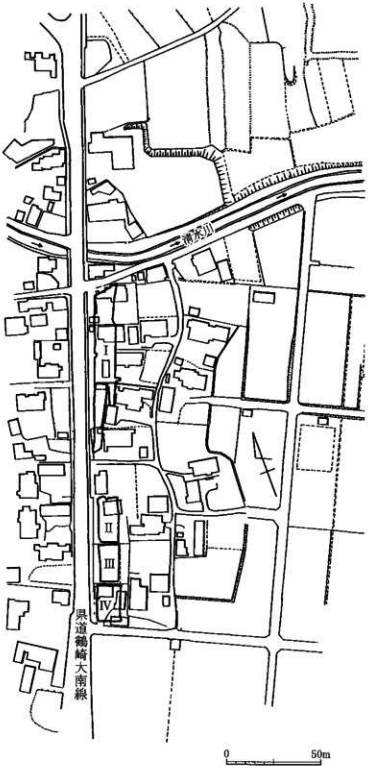
第Ⅲ章　遺跡の概要

調査を始めた時点では全て撤去されていたが、調査区は民家の密集する場所にある。重機により表土を除去したが、人為的な盛り土が平均１ｍ以上、北部では２ｍ近く堆積していた。南部では民家の境界にコンクリート壁が深く構築されていたため、撤去せず調査した。調査区が分断されたため、便宜上Ⅰ～Ⅳ区に分けて調査した。試掘調査でⅠ区とⅡ区の間は地山が落ち込み、東から青灰色の粘土層が入り込んで堆積しているのを確認していたので、本調査では表土を剥いでいない。

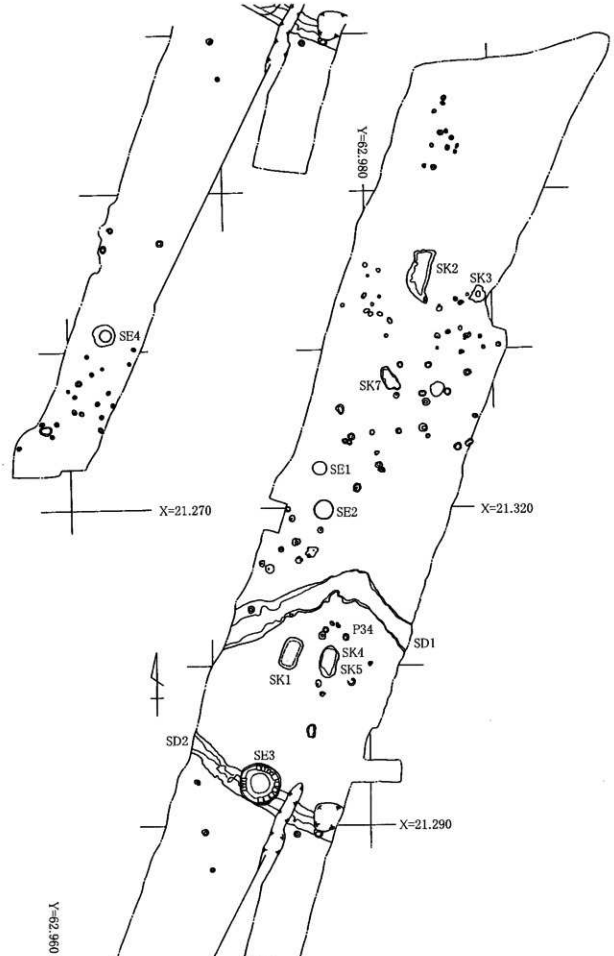
検出した遺構・遺物の時代別の内訳は以下のとおりである。

縄文時代	晩期土器片
弥生時代	後期頃の土器片
古墳時代	須恵器片
古代	土坑１基・溝１条？・土師器
中世	掘立柱建物跡８棟・土坑・溝３条？・井戸１基
近世～現代	土坑・溝・井戸３基

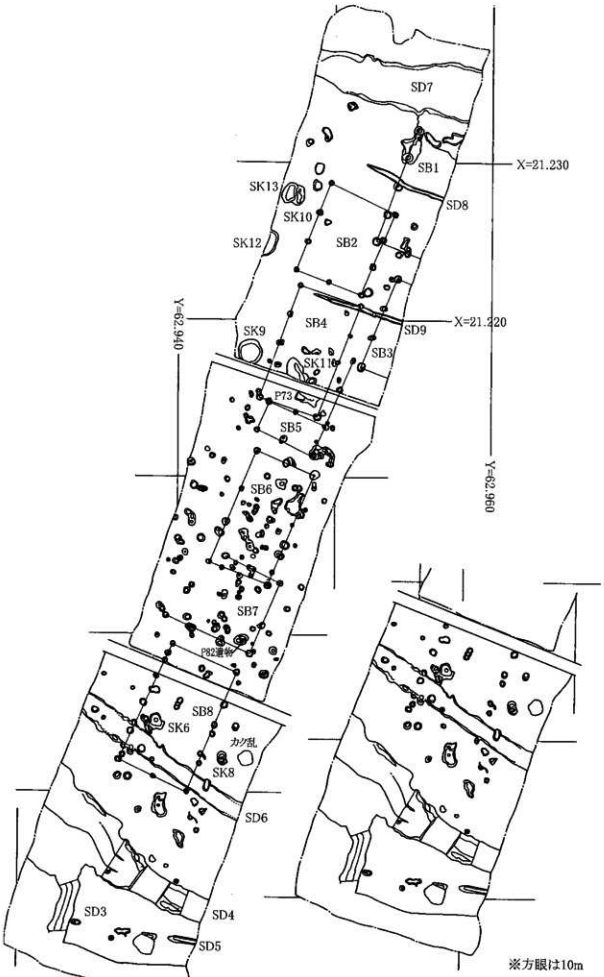
井戸を４基検出したことでも分かるように、調査中湧水が絶えず、ポンプによる排水が必要であった。２基は調査前まで使用していた井戸であり、図化しなかった。



第３図　久保田遺跡調査区の位置



第４図　久保田遺跡北部地区（Ⅰ区）遺構分布図



第５図　久保田遺跡南部地区（Ⅱ～Ⅳ区）遺構分布図

第Ⅳ章　遺構と遺物

時期のはっきりしない遺構が少なからずあるので、遺構種類毎に述べてゆきたい。

掘立柱建物跡

建物跡として報告するのは８棟である。その中には、調査区が狭いため全貌のわからないものや、側辺の一列しか確認できないものも含んでいる。すべてⅡ～Ⅳ区で検出した。Ⅰ区では柱穴類を１００個以上検出したが、掘立柱建物跡を一箇所も復元できなかった。庇の付く建物もない。面積では８号掘立柱建物跡が大きく、桁行きの柱間隔では６号掘立柱建物跡が飛び抜けている。

１号掘立柱建物跡（ＳＢ１・第６図）

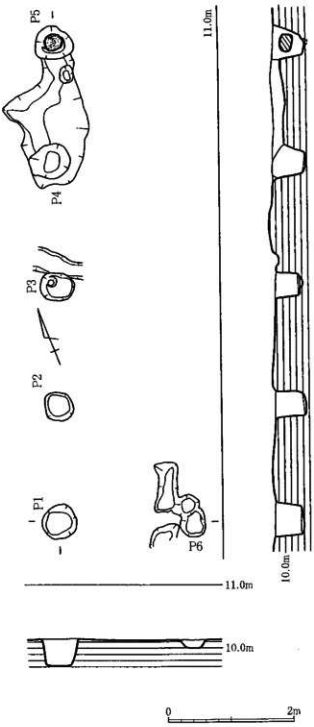
Ⅱ区の東部に位置する５個の柱穴及び直角方向にある１個からなる建物跡推定地である。４間×１間以上の規模をもつ。長軸を南北方向にとる建物であろう。主軸の方位はＮ－２１°－Ｅである。Ｐ６は他のものより浅いので、疑問がある。柱穴の間隔はＰ１－186㎝－Ｐ２・Ｐ２－189㎝－Ｐ３・Ｐ３－200㎝－Ｐ４・Ｐ４－189㎝－Ｐ５・Ｐ１－215㎝－Ｐ６となり、Ｐ１からＰ５の平均値は191㎝である。

出土遺物はない。

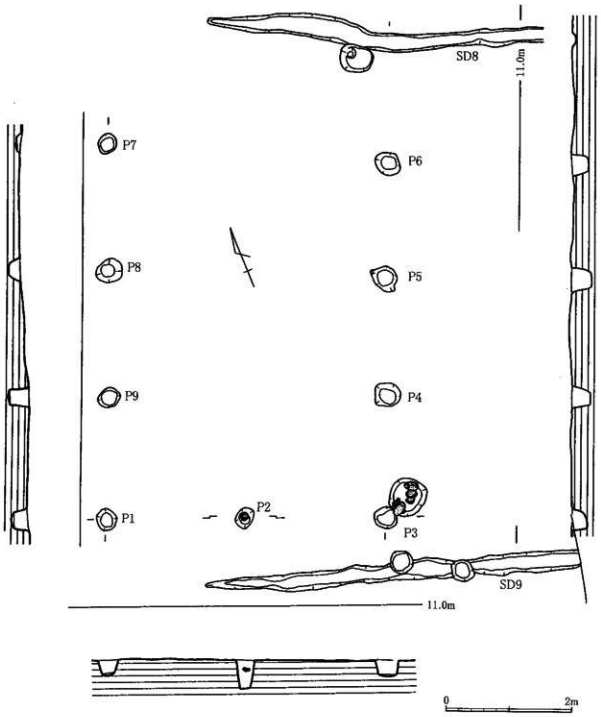
２号掘立柱建物跡（ＳＢ２・第７図）

Ⅱ区の中央部のＳＤ８とＳＤ９がつくる空間に位置する。２間×３間の建物跡である。主軸はＮ－２２°－Ｅを指す。梁行き間はＰ１－220㎝－Ｐ２・Ｐ２－228㎝－Ｐ３・Ｐ６－451㎝－Ｐ７で、平均値は225㎝である。桁行き間はＰ３－193㎝－Ｐ４・Ｐ４－186㎝－Ｐ５・Ｐ５－183㎝－Ｐ６・Ｐ７－200㎝－Ｐ８・Ｐ８－200㎝－Ｐ９・Ｐ９－196㎝－Ｐ１で、平均値は193㎝である。

出土遺物はない。



第６図　ＳＢ１実測図



第７図　ＳＢ２実測図

３号掘立柱建物跡（ＳＢ３・第８図）

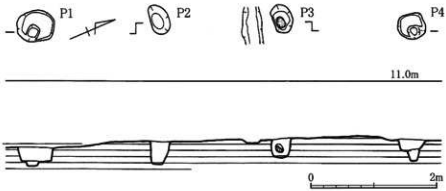
Ⅱ区南東部に位置する柱穴４個が１列に並ぶ部分のことである。直角方向の柱が見つかってないので性格は明らかではない。主軸の方位はＮ－２２°－Ｅである。柱の間隔はＰ１－201㎝－Ｐ２・Ｐ２－203㎝－Ｐ３・Ｐ３－214㎝－Ｐ４で、平均値は206㎝である。

出土遺物はない。

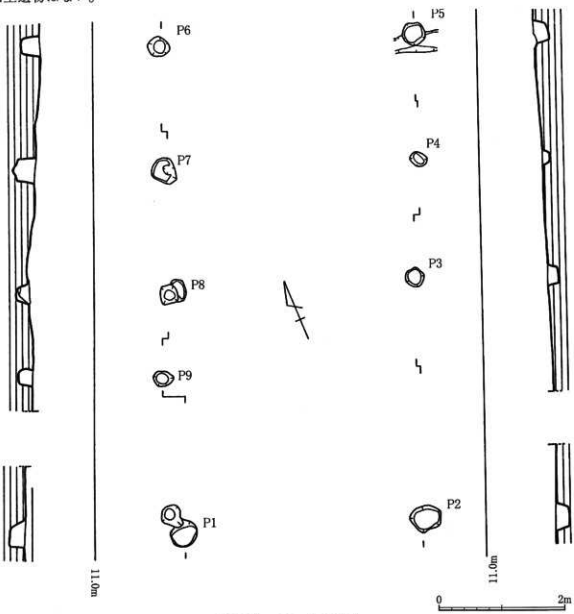
4号掘立柱建物跡　（ＳＢ４・第９図）

Ⅱ区南部からⅢ区に位置する１間×４間の建物跡である。主軸はＮ－２２°－Ｅを指す。梁行き間はＰ１－383㎝－Ｐ２・Ｐ５－408㎝－Ｐ６で、平均値は396㎝（２間建物とすれば198㎝になる）である。桁行き間はＰ２－386㎝－Ｐ３・Ｐ３－186㎝－Ｐ４・Ｐ４－199㎝－Ｐ５・Ｐ６－195㎝－Ｐ７・Ｐ７－199㎝－Ｐ８・Ｐ８－133㎝－Ｐ９・Ｐ９－253㎝－Ｐ１で平均値はすべて４間として193㎝となる。

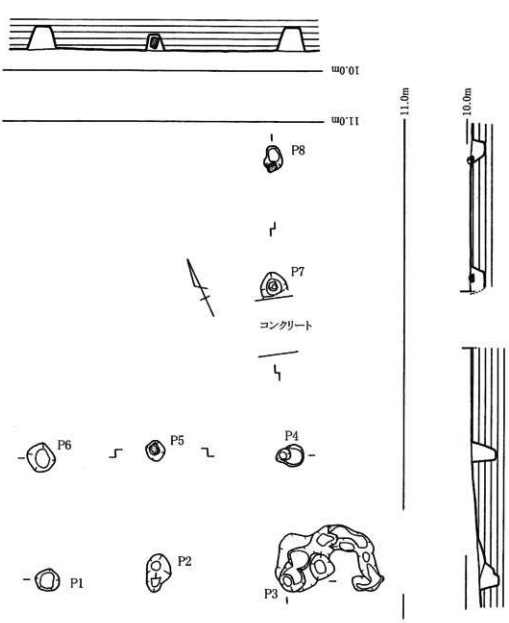
出土遺物はない。



第８図　ＳＢ３実測図



第９図　ＳＢ４実測図

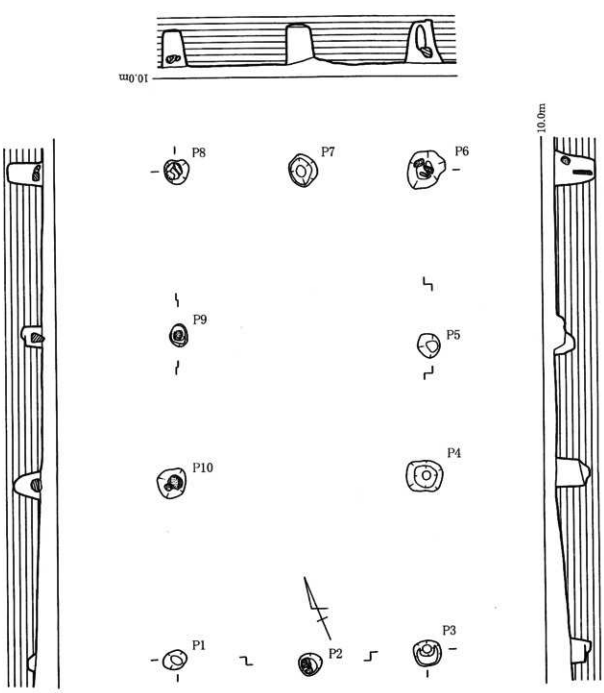


第10図　ＳＢ５実測図

５号掘立柱建物跡（ＳＢ５・第10図）

Ⅱ区からⅢ区にかけて検出した１間×２間の建物跡に直線的に並んだ２個の柱穴を組み合わせたものである。建物跡の主軸方位ははＮ－６５°－ｗを指す。梁行き間は190㎝～200㎝、桁行き間は平均191㎝。梁行き間はＰ１－193㎝－Ｐ６・Ｐ３－199㎝－Ｐ４で、平均値は196㎝となる。桁行き間はＰ１－173㎝－Ｐ２・Ｐ２－211㎝－Ｐ３・Ｐ４－206㎝－Ｐ５・Ｐ５－178㎝－Ｐ６で、平均値は192㎝である。柱列間はＰ４－267㎝－Ｐ７・Ｐ７－209㎝－Ｐ８で平均値は238㎝である。

出土遺物はない。



第11図　ＳＢ６実測図

６号掘立柱建物跡（ＳＢ６・第11図）

Ⅲ区の中央部に位置する２間×３間の建物跡である。主軸はＮ－２３°－Ｅを指す。梁行き間はＰ１－213㎝－Ｐ２・Ｐ２－189㎝－Ｐ３・Ｐ６－195㎝－Ｐ７・Ｐ７－203㎝－Ｐ８で、平均値は200㎝である。桁行き間は３－274㎝－Ｐ４・Ｐ４－205㎝－Ｐ５・Ｐ５－277㎝－Ｐ６・Ｐ８－259㎝－Ｐ９・Ｐ９－235㎝－Ｐ１０・Ｐ１０－281㎝－Ｐ１で、平均値は255㎝である。

出土遺物はない。

7号掘立柱建物跡（ＳＢ７・第12図）

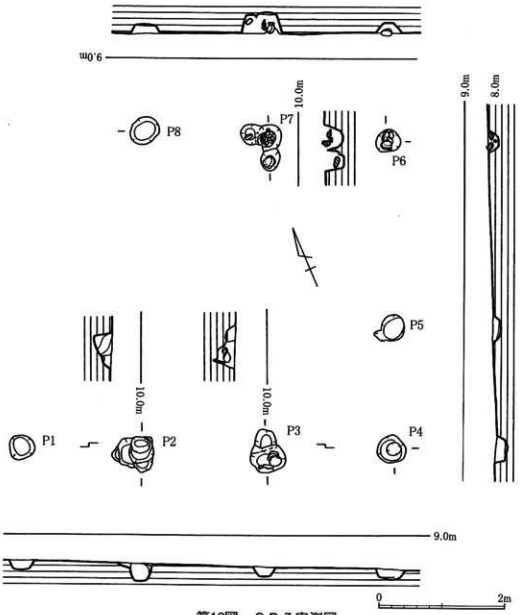
Ⅲ区南部に位置する２間×３間の建物跡である。主軸はＮ－６７°－Ｗを指す。ＳＢ７梁行き間はＰ４－186㎝－Ｐ５・Ｐ５－296㎝－Ｐ６で、平均値は241㎝である。桁行き間はＰ1－191㎝－Ｐ２・Ｐ２－200㎝－Ｐ３・Ｐ３－204㎝－Ｐ４・Ｐ６－195㎝－Ｐ７・Ｐ７－194㎝－Ｐ８で、平均値は197㎝である。

出土遺物はない。

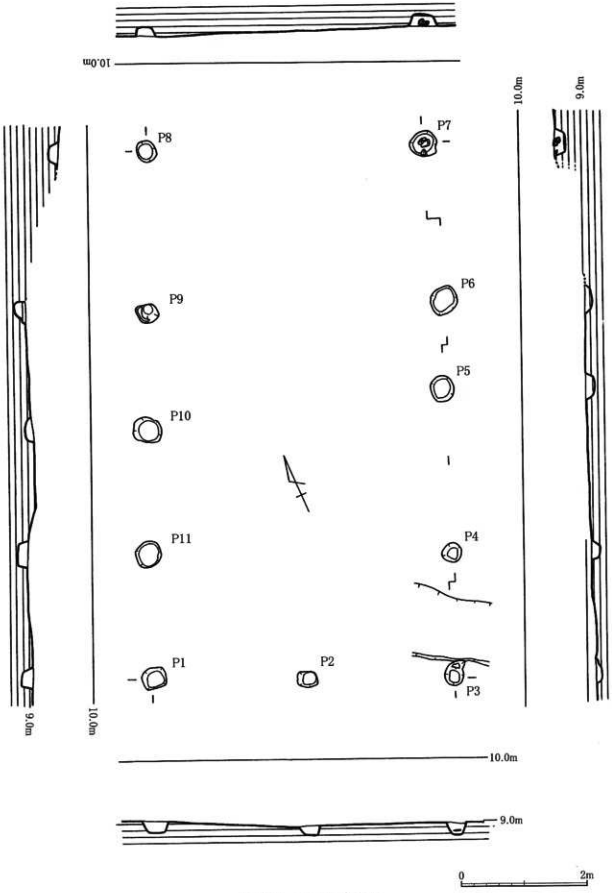
8号掘立柱建物跡（ＳＢ８・第13図）

Ⅲ区南部からⅣ区北部に位置する２間×４間の建物跡である。主軸はＮ－２２°－Ｅを指す。梁行き間はＰ１－247㎝－Ｐ２・Ｐ２－233㎝－Ｐ３・Ｐ７－444㎝－Ｐ８で、平均値はすべて２間として231㎝である。桁行き間はＰ３－195㎝－Ｐ４・Ｐ４－263㎝－Ｐ５・Ｐ５－142㎝－Ｐ６・Ｐ６－247㎝－Ｐ７・Ｐ８－250㎝－Ｐ９・Ｐ９－193㎝－Ｐ１０・Ｐ１０－196㎝－Ｐ１１・Ｐ１１－199㎝－Ｐ１で、平均値は211㎝である。

出土遺物はない。



第12図　ＳＢ７実測図


10.0m
10.0m
9.0m
P8
P7
P9
P6
P5
P10
P11
P4
P1
P2
P3
9.0m
10.0m
10.0m
9.0m
0
2m

第13図　ＳＢ８実測図

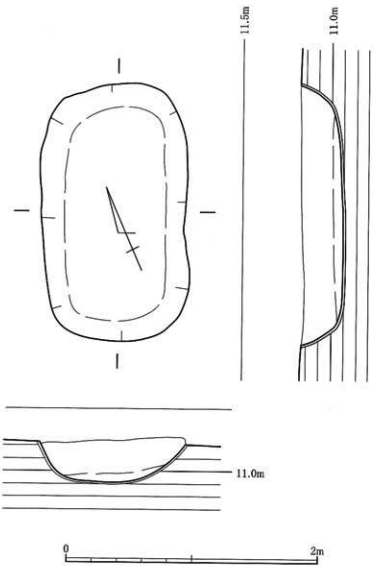
土坑

柱穴ではない大型の穴を土坑として記述する。合計１３基あり、北部のⅠ区に６基、Ⅱ区に５基、Ⅳ区に２基が分布していた。古代に属すのは３号で、１号・４号・５号は近世かそれ以降である。残りの大半は中世であろうと考えている。

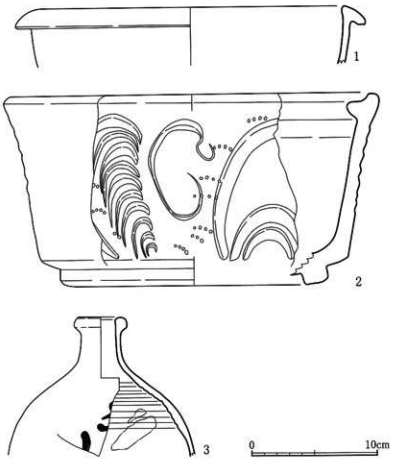
１号土坑（ＳＫ１）（第14図）

Ⅰ区の中央部に位置し、すぐ東側には４号土坑と５号土坑がある。１号土坑の壁面及び床面は厚さ３㎝の三和土よりなり硬く、水漏れしない。また、壁と床は丸みを帯び、屈折することなく移り変わっている。規模は長さ203cm、幅が118cm、深さ33cm を測る。

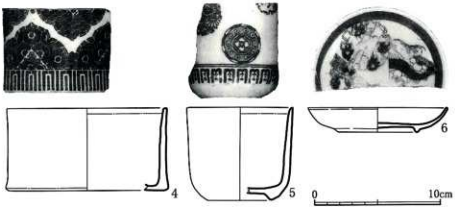
出土遺物（第15図１～３・第16図４～６）　１は器面が磨かれた瓦質の黒色の火鉢。最大径28.0cm、口径24.2cm。２は瀬戸の水鉢。口径30.1cm、器高15.1cm、高台径21.4cm。３は徳利で白字で店の名？が書かれている。口径4.2cm。釉は黒褐色。４はコバルト色の型紙摺り製品で、段重。口径12.8㎝、高さ6.6㎝。明治。５は銅判転写の蓋付き筒形椀である。６は赤を基調に黄・緑を加えた銅判転写の皿。口径11.2㎝。５・６は明治後半以降。



第14図　ＳＫ１実測図



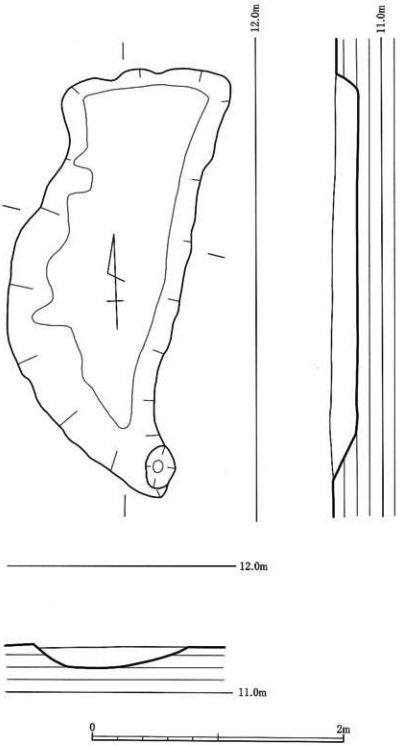
第15図　ＳＫ１出土遺物実測図



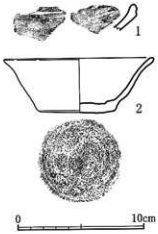
第16図　ＳＫ１出土遺物実測図

2号土坑（ＳＫ２）（第17図）

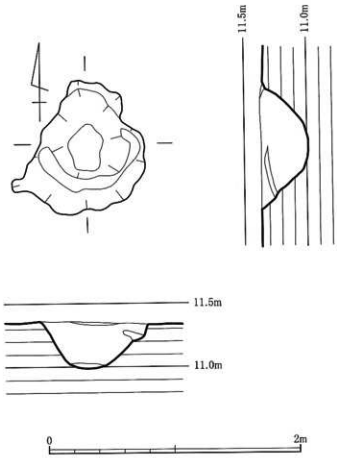
Ｉ区北部に位置する南北に長い不整な土坑である。出土遺物はない。長さ339㎝、最大幅136㎝、深さ20㎝。出土遺物はない。



第17図　ＳＫ２実測図



第18図
ＳＫ３出土遺物実測図

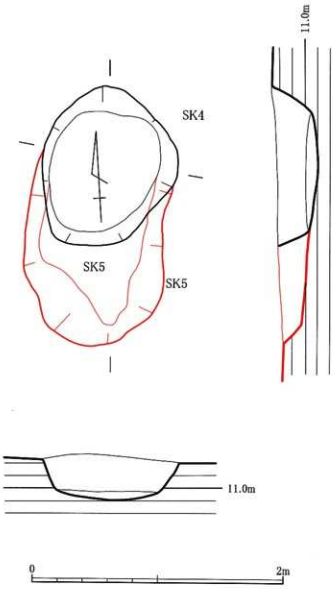


第19図　ＳＫ３実測図

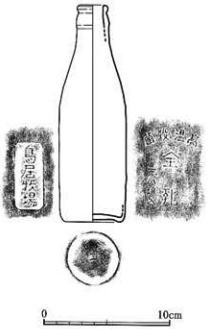
３号土坑（ＳＫ３）（第19図）

Ｉ区の北部に位置し、西側には２号土坑がある。平面形は不整な円形で、一部二段掘りになっている。規模は長さ107㎝、幅106㎝、深さ37㎝を測る。

出土遺物（第18図１・２）　１は内面磨き、外面なで調整、口縁部に沈線のある縄文晩期の浅鉢。２は口径11.9㎝、底径5.6㎝、器高4.2㎝を測る。底部の調整はへら切りで、９世紀の土師器杯である。３号土坑の所属時期を示す遺物であろう。



第20図　ＳＫ４・５実測図



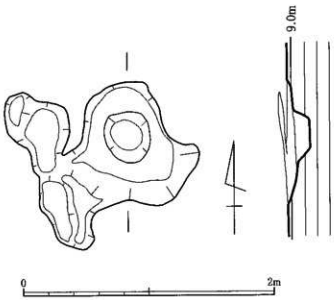
第21図　ＳＫ５出土遺物実測図

４号土坑（ＳＫ４）（第20図）

Ｉ区の中央部、１号土坑の東側にある。５号土坑と重複し、５号土坑よりも新しい。平面形は不整円形で、長さ126㎝、幅107㎝、深さ36㎝である。現在の馬車部品の鉄製品が出土した（図化していない）。

５号土坑（ＳＫ５）（第20図）

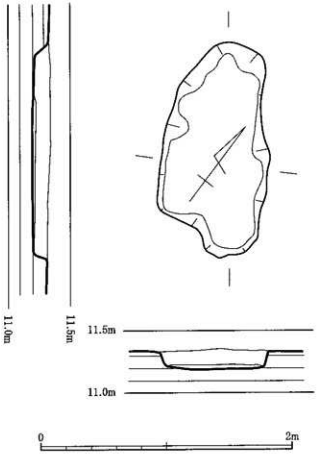
出土遺物（第21図）　無色透明ビン。側面に「菌殺温高」「全乳」「一、八立分入」「鳥居牧場」、底面に山形の下に「ウコ」の字が浮き出ている。栓は王冠使用である。口径2.5㎝、高さ17.1㎝、最大径5.4㎝。



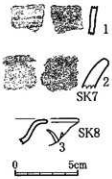
第22図　ＳＫ６実測図

６号土坑（ＳＫ６）（第22図）

Ⅳ区の北部、２号土坑の南側に位置する不整形の土坑である。西半部と東半部は別の遺構であろう。東部を６号土坑とする。６号土坑は二段掘りになっていて、浅い土坑と柱穴が重複している可能性がある。浅い部分の規模は長さ98㎝、幅109㎝、深さ9㎝である。出土遺物はない。



第23図　ＳＫ７実測図



第24図　ＳＫ７出土遺物実測図

７号土坑（ＳＫ７）（第23図）

Ⅰ区の北部、３号土坑の西側に位置する。平面形はややいびつで、それからみて２基の土坑の重複があるのかも知れない。長さは188㎝、幅は85㎝で、床面は平坦で深さ15㎝を測る。

出土遺物（第24図１・２）　１は内面なで、外面二枚貝条痕の縄文晩期土器。２は弥生あるいは古代。

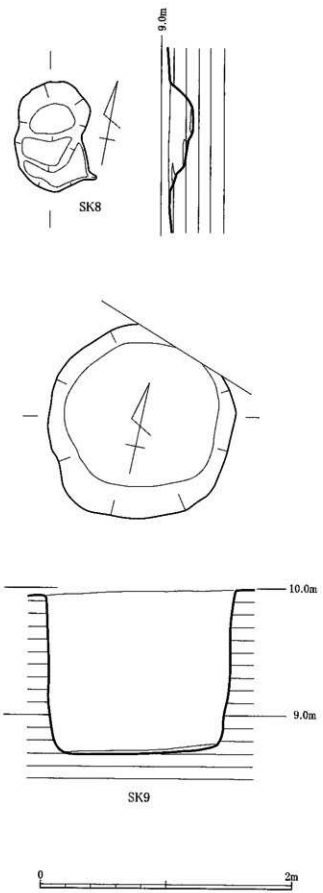
８号土坑（ＳＫ８）（第25図）

Ⅳ区の北東部にあり、６号溝状遺構の北に位置する。三段掘りになっていて、重複の可能性がある。規模は長さ87㎝、幅57㎝、深さ18㎝である。

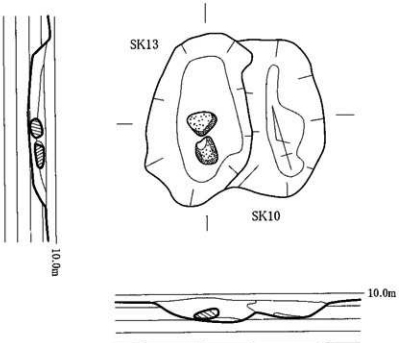
出土遺物（第24図３）　１３世紀の中国製青磁皿で、外面にへらで蓮弁紋の輪郭を描く。

９号土坑（ＳＫ９）（第25図）

Ⅱ区の南東部に位置する円形の深い土坑である。久保田遺跡の中世以降を覆っていた黒色土が内部を充填していた。壁はまっすぐに立ち上がり、３号井戸のような壁面上部の崩落は認められない。規模は東西150㎝、南北154㎝、深さ128㎝を測る。



第25図　ＳＫ８・９実測図

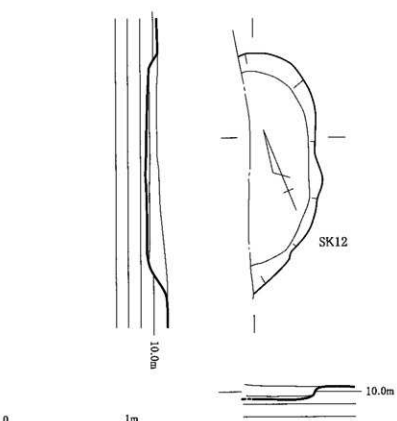


10号土坑（ＳＫ10）
（第26図）

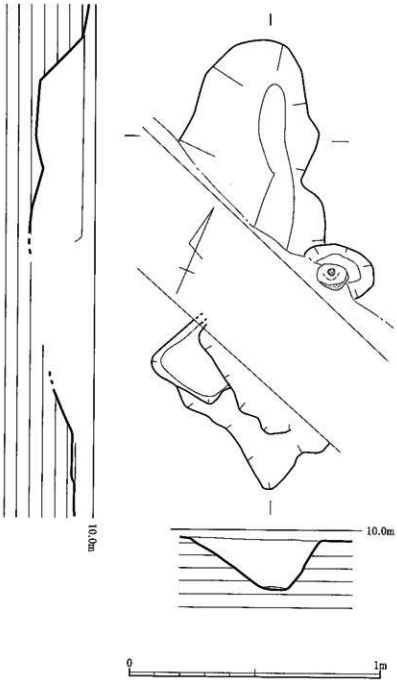
Ⅱ区の中央西部に位置し、１３号土坑と重複する。長さ124㎝、幅83㎝以上、深さ12㎝を測る。出土遺物はない。

11号土坑（ＳＫ11）
（第27図）

Ⅱ区とⅢ区の境界に位置し、土坑の一部はコンクリート壁に潜り込んでおり、複数の重複の可能性がある。出土遺物はない。



第26図　ＳＫ10・12実測図



第27図　ＳＫ11実測図

12号土坑（ＳＫ12）（第26図）

Ⅰ区の１３号土坑の南側にあり、遺構は調査区外に延びている。現状の規模は長さ190㎝、幅66㎝、深さ15㎝である。出土遺物はない。

13号土坑（ＳＫ13）（第26図）

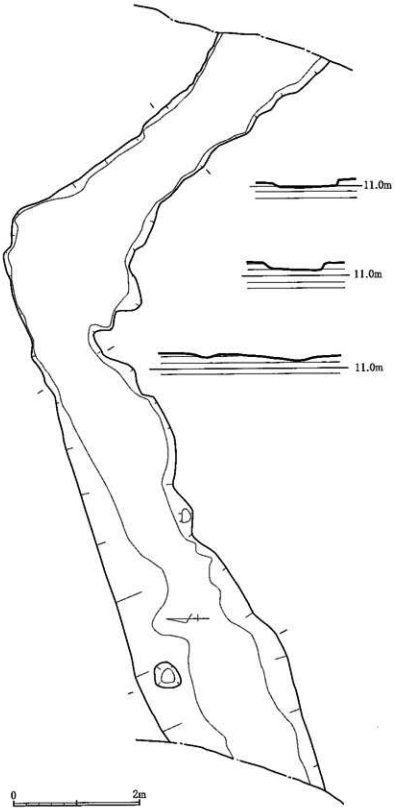
１０号土坑と重複する。出土遺物は円礫２点だけである。規模は１０号土坑と同程度で、長さ140㎝、幅84㎝、深さ18㎝である。

溝状遺構

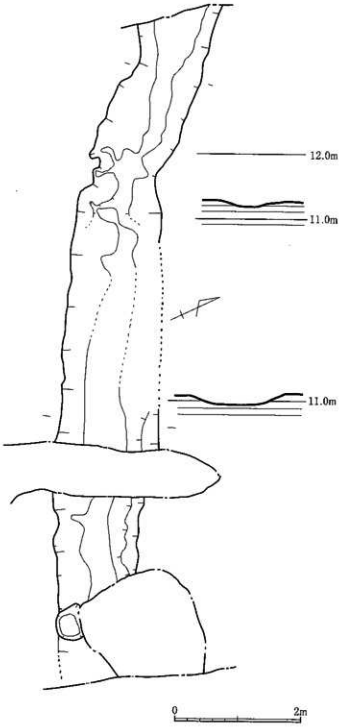
Ⅰ区～Ⅳ区で合計９条の溝状遺構を検出した。溝の方向は基本的に東西方向を示し、地形の傾斜と同じ向きになっている。したがって、久保田遺跡では湧水が多いのでその排水施設的機能を帯びたものが多いようである。逆に南北方向に走る溝状遺構は認められなかった。また、調査区内中央部付近で多数の掘立柱建物跡が分布していたが、これらを区画する西側及び東側の溝も存在するとみられるが、細長い調査区であったため今回の調査区内では検出していない。

１号溝状遺構（ＳＤ１）（第28図）

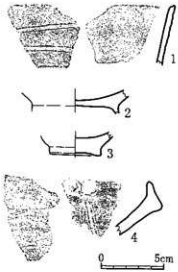
Ⅰ区中部に位置する。全体の形は「く」字形に折れ曲がり、幅は最大235㎝、深さは最大13㎝である。床面は西に高く、調査中常に水が流れていた。



第28図　ＳＤ１実測図



第29図　ＳＤ２実測図

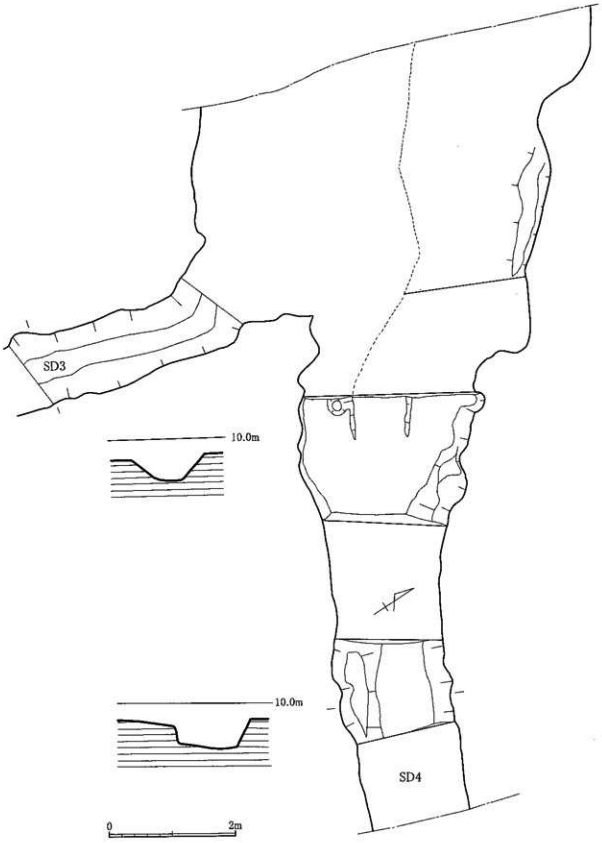


第30図　ＳＤ２出土遺物実測図

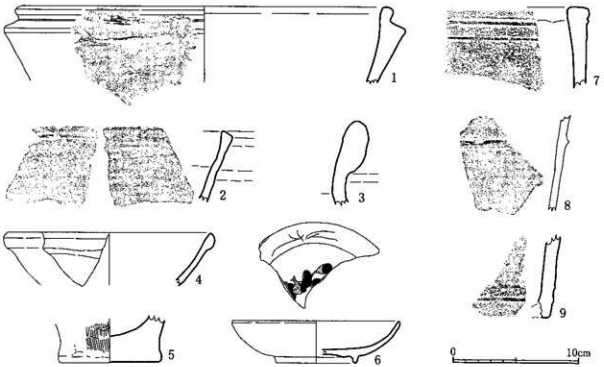
２号溝状遺構（ＳＤ２）（第29図）

Ｉ区中央部に位置し、北西から南東に緩く弧を描くように走る。幅は100㎝～150㎝位、深さは15㎝程度である。床面の高さは西側が高く、東側に低くなる。中央部には中世の井戸（ＳＥ３）が重複し、すぐ東側を民家の境界であるコンクリート壁が破壊していた。

出土遺物（第30図１～４）　１は外面に沈線（下端にもある）の模様をもつ縄文晩期の土器。内面は磨き、外面はなで調整。２・３はなで調整の土師器、４は瓦質のすり鉢。



第31図　ＳＤ３・ＳＤ４実測図

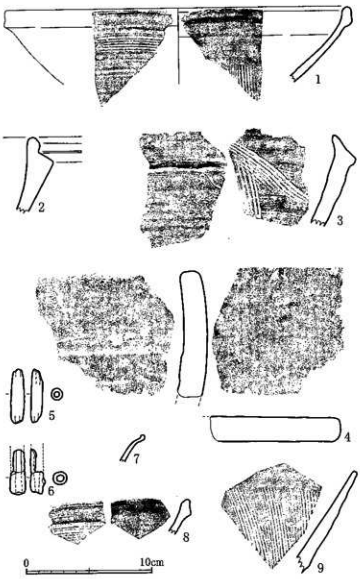


第32図　ＳＤ３出土遺物実測図

３号溝状遺構（ＳＤ３）（第31図）

Ⅳ区の南西部にあって南北に2.5m走りそこで東西に曲がる。北部では４号溝との間に円礫が集積、あるいは廃棄されたような状態で存在する部分があり、これによって切られていた。南部は自然地形の傾斜によって、溝は消滅していた。ただ、調査の際、排水のため南端部は重機により排水路をつくったため図示したものより１ｍ弱長かった。３号溝の上面幅は1.1ｍ前後で深さは約35cmである。北側の礫集積部は常時滴水状態だったため、この部分の掘り下げは行っていない。３号溝状遺構もそこからの流水が絶えなかった。

出土遺物（第32図１～９）　１・２、7～９は瓦質土器である。１は火鉢、２はすり鉢、７は火鉢で、2個一一組の雷紋の刻印がある。８には放射状の刻印が、９には左右の渦紋を組み合わせた内部に斜め沈線３本がある。３は備前焼甕。以上は16世紀代のものである。４は１２世紀前後の中国製白磁。５は弥生時代中期頃の甕形土器の底部。６は近世の肥前産磁器。６によればＳＤ３の所属時期は近世と考えられるが、中世のものも少なからず出土しているのでこれより遡る可能性も捨てきれない。



第33図　ＳＤ４出土遺物実測図

４号溝状遺構（ＳＤ４）（第31図）

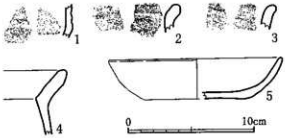
Ⅳ区の南部に東西方向に走る溝状遺構である。東側で幅が狭くて160㎝、中央部分では二本に分かれたようになり合わせて幅約280㎝である。深さは深い部分で52㎝ある。西部では湧水のため常時どろだらけの調査となり、部分的調査とした。

出土遺物（第33図1～９）

１・８・９は近世のすり鉢、２は中世の火鉢、３は16世紀の中頃以前の備前焼すり鉢。４は内面に桶巻き痕の布目圧痕がついた平瓦。中世であろう。５・６は土錘。７は赤い土師器杯で9世紀のもの。

５号溝状遺構（ＳＤ５）（第５図）

Ⅳ区東南にある溝状遺構である。東西5.4ｍにわたり二箇所で途切れて並んでいる。真ん中の土坑状部分は南側にある攪乱により切り込まれている。床面の深さは西から東に傾斜しており、西部で深さ２㎝と浅く、東部で深さ６㎝である。幅は最大43㎝を測る。出土遺物はない。

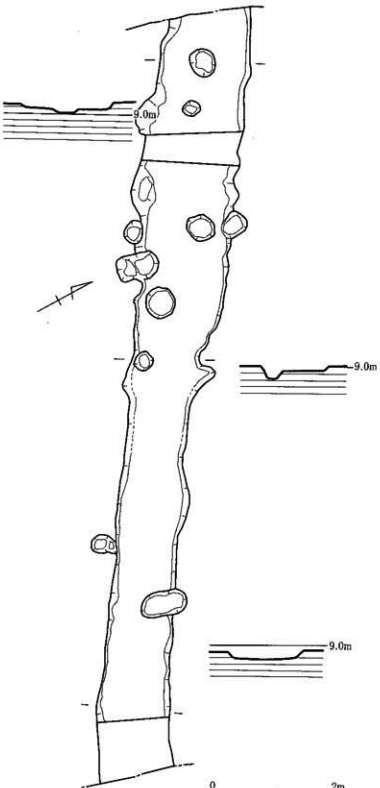


第34図　ＳＤ６出土遺物実測図

６号溝状遺構（ＳＤ６）

（第35図）

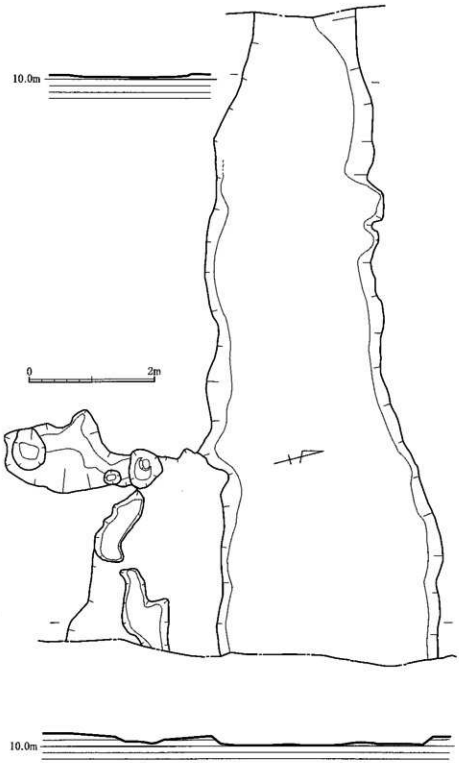
Ⅳ区の北部に位置し、Ｎ－５６°－Ｗの方向に直線的に走る溝状の遺構である。幅は172㎝～94㎝で、東部はほぼ100㎝程度に一定する。深さは１５㎝前後で、床面は西が高く、東に下がる。



第35図　ＳＤ６実測図

出土遺物（第34図１～５）

１は幅広い沈線が２条巡る。縄文晩期の深鉢か。２～５は土師器で、２～４は甕形土器で、４は奈良時代から平安時代初めの時期に、北九州を含む豊前から豊後地方に分布する「企救型甕」である。（佐藤２００１）５は杯で、内外面ともなで調整している。口径13.8㎝、底径6.4㎝。これらは９世紀頃のもの。



第36図　ＳＤ７実測図

７号溝状遺構（ＳＤ７）（第36図）

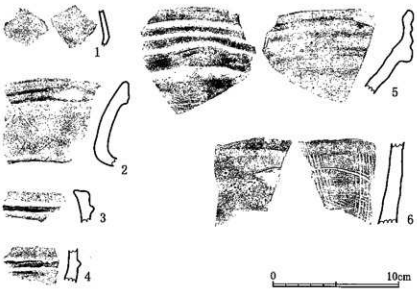
Ⅱ区の北部を東西方向に走る溝状遺構である。深さは最大15㎝程度しかない。上面の規模は西部で幅160㎝、東にゆくにつれて広がり東端部で幅350㎝となる。床面の高さは緩やかであるが西側の方が高い。南側の８号溝状遺構からは４ｍ弱距離がある。埋土から少量ではあるが中世を中心とした遺物が出土した。

出土遺物（第37図１～６・38図７～10）

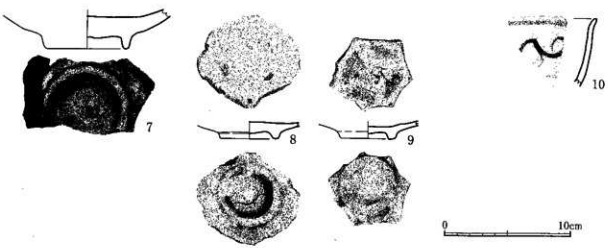
１は縄文晩期の鉢形土器。２は古墳時代頃の須恵器の甕。３・４は中世の瓦質の火鉢。５・６は中世の備前焼のすり鉢。７は竜泉窯青磁椀。高台内面は輪状に赤茶色の地が見える。８・９は白磁皿で、見込みと畳付きに砂目積み跡が４個ある。１０は肥前系染付けで、１７世紀代のもの。

８号溝状遺構（ＳＤ８）・９号溝状遺構（ＳＤ９）（第７図）

Ⅱ区の中央部にあり、２号握立柱建物跡の南北を囲むように平行に走る。相互の距離は溝の中心で測って東部で8.3ｍ、西部で8.9ｍを測る。上面の幅は30㎝前後で、深さは最大８㎝である。内部には砂が堆積していたので、水が流れることもあったらしい。



第37図　ＳＤ７出土遺物実測図



第38図　ＳＤ７出土遺物実測図

井戸

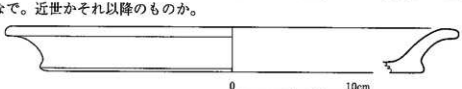
Ｉ区だけに５基の井戸（１～５号井戸）が分布した。１号井戸・２号井戸・５号井戸は調査直前まで使われていた現代の井戸で、埋めてなかった１号、埋めていたが少し内部を掘り下げた２号は常に水が湧いていた。

１号井戸（ＳＥ１）

Ｉ区の北部から中央部にかかる場所に位置する現代の井戸である。

２号井戸（ＳＥ２）

コンクリート桶を使用した現代の井戸である。内部は埋まっていたので少し浚った時に出土したのが次の遺物である。第３９図は素焼き製品で口径36.2cm、底径30.5cm、高さ3.6cm。外底面以外は横方向のなで。近世かそれ以降のものか。



第39図　ＳＥ２出土遺物実測図

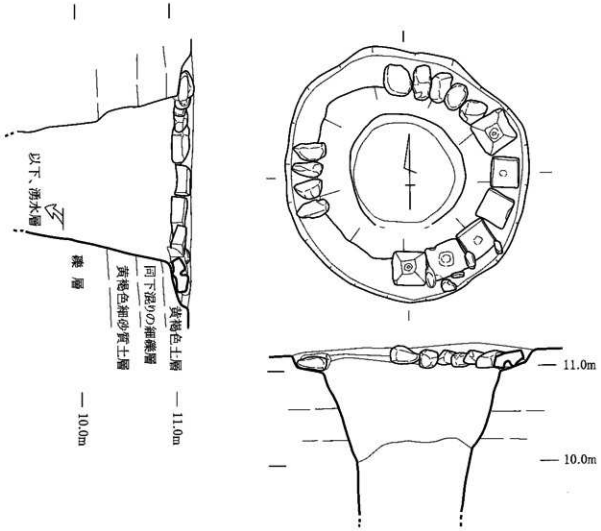
３号井戸（ＳＥ３）（第40図）

Ｉ区の南部に位置する井戸で、２号溝状遺構を切って作られている。平面形は円形で、直径は約2.6m、内側に石を敷き詰めて踏み場にしている。そのうち東から南にかけては五輪塔の部品を転用している。踏み場の内径は約1.8mを測る。全体の断面形をみると検出面から１m程のところで壁の傾斜が変わるが、上側は使用時に自然に少しずつ崩落したものであろう。下部の壁面を上に延ばして推定すれば、本来の上面の内径は1.4m程度であろう。検出面まで人為的に埋められ、内部から多量の河原石が出土した。石は２０cm～３０cm程度のものが多く、ほとんど焼けて赤く変色しており、割れたものもかなりあった。下記の遺物が混入していた。

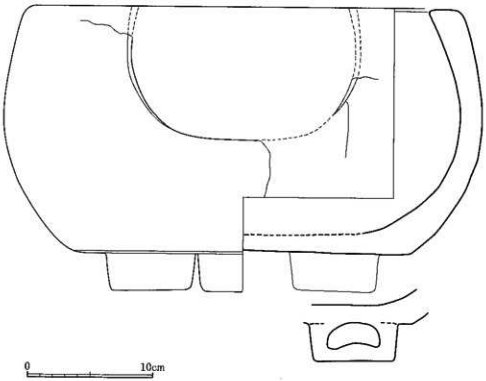
湧水量が多く常時ポンプを使用する状態だったため、完掘はしていない。

出土遺物（第41～47図）

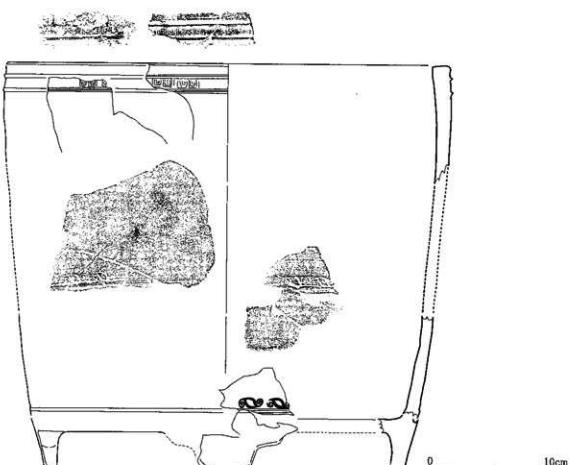
第４１図は厚手の素焼き製品である。表面はもれなくへら磨きされている。平坦な底部に径７cm、高さ３cmの円形の脚が３個付き、上半部には半円形の窓が開いている。茶道具の風炉である。口縁部は内径29.6cm、外径34.6cm で脚を除いた高さは19.5cm、全体の高さは22.4cm、底径は26.8cmである。第４２図は瓦質の火鉢で、口縁部と胴下部と脚部の破片がある。口径は35.5cm、底部の径は31.0cm。口縁部外面には細い突帯が２条ある間に、雷紋２個組みの刻印が三箇所残る。底部は細い突帯状部分の上位に図にあるような渦２個を左右に組み合わせた模様の刻印がある。第４３図は備



第40図　ＳＥ３実測図

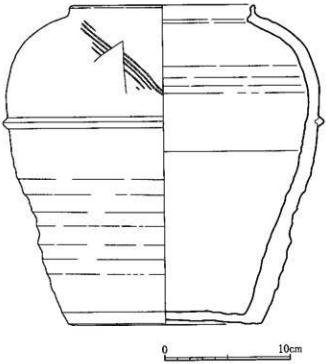


第41図　ＳＥ３出土遺物実測図

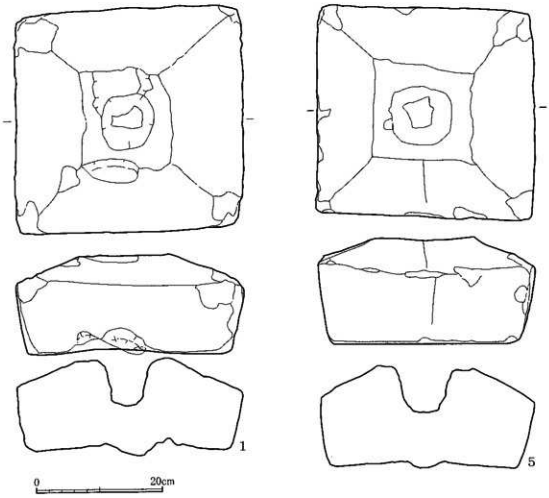


第42図　ＳＥ３出土遺物実測図

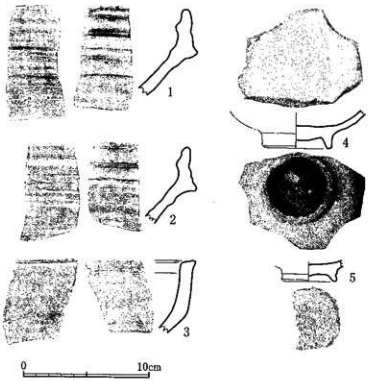
前焼き水差しで、口径14.8cm、最大径25.8cm、底径15.6cm、高さ22.3cm。ただし底部から口縁部まで接合する破片はない。肩部に５条の櫛目があり、胴部に三角突帯１本を廻らせる。灰色を呈する。第４５図 １・２は備前焼きすり鉢。３は明茶色の素焼き製品で、器面は磨かれている。４は白磁椀で、高台内面は回転へら切りし釉は一部畳付きまでかかる。１６世紀の朝鮮製か。高台径5.6cm。5は高台径4.5cmの青磁で、見込みには刻印で花弁で囲まれた中心に「宝」字がある。高台外面は段をもつ。釉は高台内面下端にも３mmほどかかる。高台内面は回転へら切りである。１４世紀後半頃のもの。第４４図１は火輪で下面の中央部が突き出ている。一辺36.3cm×35.5cm、高さ16.0cm。５は火輪で、これも同じく突き



第43図　ＳＥ３出土遺物実測図

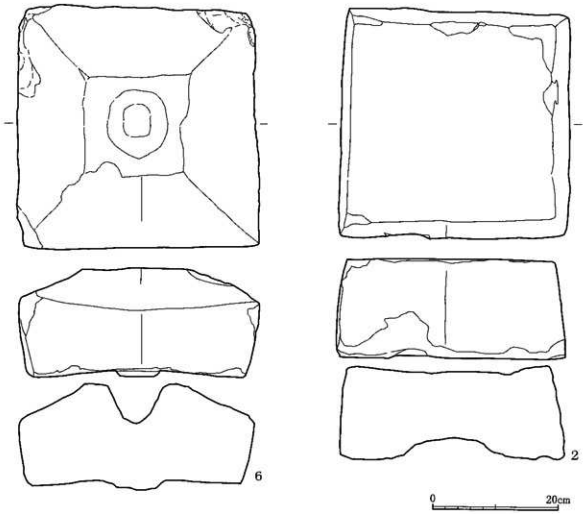


第44図　ＳＥ３出土遺物実測図



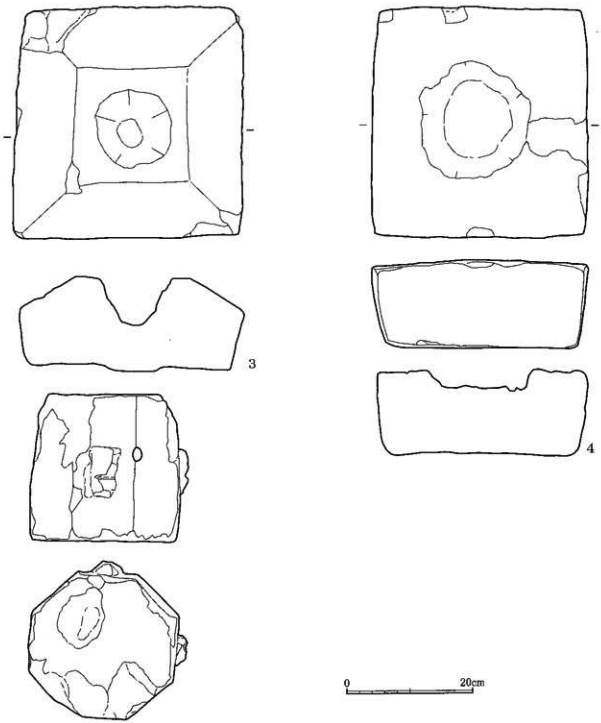
第45図　ＳＥ３出土遺物実測図

出ている。屋根部上面のひとつとそれに接する側面に刻線がある。一辺34.8㎝×33.3㎝、高さ16.8㎝。第４６図２・６は踏み場に並んでいたものである。２は五輪塔の火輪で下面中央は円形に削り残されている。５と同様に屋根部上面のひとつとそれに接する側面に刻線がある。一辺38.6㎝×38.7㎝、高さ17.3㎝。６は火輪で一辺345㎝×364㎝、高さ15.1㎝である。刻線はない。第４７図３は火輪で一辺371㎝×364㎝、高さ13.9㎝である。４は五輪塔の地輪である。上面中央部は径18㎝前後の円形に削り込まれている。一辺345㎝×364㎝、高さ13.9㎝である。第４７図左下は凝灰岩製である。上下



第46図　ＳＥ３出土遺物実測図

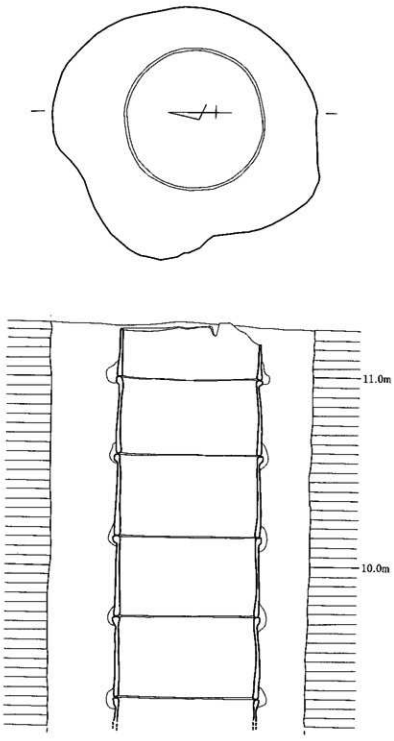
が平たく、側面は八面体をなす。その内の４面に花瓶を浮き彫りしている。ただし、２像は浅く簡略な造形である。側面の表面は焼けて欠け落ちた部分が多い。底面は焼けておらず、立った状態で火災に遭遇したことが分かる。上部に屋根をもち、下部に長い脚をもつ無縫塔か。高さ23.4㎝、浮き出た部分を入れた最大幅25.2㎝、八角形部分23.5㎝である。無縫塔は本来は裃宗寺院の住職の墓塔であるが、次第に在家の人々の墓塔にもなった。



第47図　ＳＥ３出土遺物実測図

4号井戸（ＳＥ４）（第49図）

Ｉ区の南端に位置する。多量の瓦礫が投げ込まれていた。湧水のため完掘していない。堀方は直径2.8m程度の垂直の穴で、井戸本体は瓦質の焼き物である。６段まで確認した。繋ぎ目の外側はコンクリートで覆われていた。



第48図　ＳＥ４実測図

井戸桶（第４９図）は瓦質と素焼きとの中間のような焼成で、黒褐色を呈する。口径は79.0cm、底径は74.8cm、高さは41.4cmである。製作にあたり桶は三段階（図の三角印の位置で分かれる）に積み重ねられている。先ず下段を帯状に刷毛具を使い整形し、順次上の帯を積み重ねて最初の工程を経て製作されている。器面調整のための刷毛具は幅７cm前後の大型品である。最終仕上げはなで調整だが、外面はほとんど刷毛目が消えるまでに丁寧な作業を行っている。

出土遺物（第50図）

貝杓子である。杷手に結びつけるために、２個小さい穴をあけている。貝種はイタヤガイである。この他、銅判転写の茶碗も出土した。したがって、貝杓子の時期は明治時代であろう。

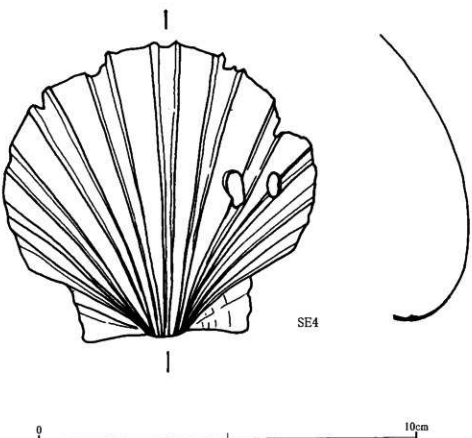
その他の柱穴出土の遺物

Ｐ３４出土遺物（第５１図１～４）　Ｉ区の中部、ＳＫ４の北東にある柱穴（Ｐ３４）から古代の土器が出土した。

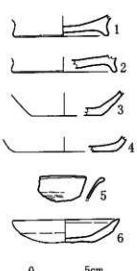
Ｐ７３出土遺物（第５１図５）青く錆びた銅製の容器片である。変形したのか歪んでいる。口縁部が厚く３mm、他の箇所は1.5mmを測る。

Ｐ８２出土遺物（第５１図６）１６世紀末頃の京都系土師器の皿である。内面と外面上部はなで調整し、薄い褐色を呈する。口縁の片側半周に煤が付着し、灯明皿として使われたことがわかる。径8.5cm、高さ1.9cm。

第49図　ＳＥ４の井戸桶実測図



第50図　ＳＥ４出土遺物実測図



第51図
柱穴出土遺物実測図

第Ⅴ章　まとめ

調査の成果を時期毎に要約し、まとめとしたい。

縄文時代　晩期（約2,800年前）の土器が少数出土した。周辺には久保田遺跡と同じく、横尾遺跡や一方平Ⅳ遺跡等の低丘陵末端や河川沿いの低地にこの時期の遺跡が分布している。このような傾向は大分平野全体に共通し、荏隈杉下遺跡・稙田市遺跡・二反田遺跡・牧六分遺跡他が知られ、低地部でのなんらかの生業活動が活発化したらしい。

古　　代　古代の遺物が調査区内の北部（Ⅰ区）と南部（Ⅳ区）で少量出土した。特にⅠ区では土坑１基（ＳＫ３）、柱穴（Ｐ３４）がこの時期の遺構である。第３４図４は奈良時代から平安時代初めの時期（８世紀後半～９世紀前半）に、北九州市を中心に、主に瀬戸内海西部周辺地域の福岡から大分、愛媛・山口に分布する「企救型甕」である（佐藤２００１）。鶴崎丘陵東部地区では、なぜかこの時期に遺跡が急増したことが発掘調査によって明らかになりつつある。

中　　世　８棟検出した掘立柱建物跡は中世に所属するとみているが、Ⅰ区には分布していない。Ⅰ区で中世のものは井戸１基（ＳＥ３）だけである。地形的にもⅠ区とⅡ区との間は丘陵が途絶え、青灰色の粘土層が入り込んでいるので、土地の利用方法が異なっていたのであろう。

一般に中世の瓦質土器は刻印が多用される。３号井戸出土の雷紋と渦紋の火鉢は、今のところ大分市内と臼杵市内の遺跡からしか出土せず、地域限定的な製品である。３号井戸は焼けた河原石により埋められていたが、火事場のゴミを処理した結果であろう。同時に出土した茶道具の風炉や備前焼き水差しは焼けた建物の中にあったものとみられる。当時このような茶器を所有できたのは富裕な商人あるいは上級の武士であろう。鎌倉時代以来、毛井地区は地頭職の平林氏が領有してきたが、中世の遺物の大半は室町時代末期の１６世紀代のもので、遡るものは第３２図４・第４４図５の２点である。掘立柱建物跡群の方位が揃っていること、全て南北約５０ｍの同一場所に集中すること、上記の特殊な遺物の存在等から考えて、久保田遺跡は平林一族の屋敷跡である可能性が高い。調査区が細長いため全体の様子は分からないが、田原氏や一万田氏の館に見られる約１００ｍ四方の屋敷地ではなかろう。久保田遺跡の屋敷規模が５０ｍ四方程度であれば、「有力在地領主等」の館（小柳１９９４・小野２００１）とみて矛盾はない。

近世以降　１号土坑出土の瀬戸産水鉢は近世瀬戸村の窯業生産編年によれば、紋様・口縁部形状や高台の位置が比較的外側にあること等により、１９世紀第２四半期であろう（「瀬戸市史・陶磁史篇」瀬戸市１９９８）。久保田遺跡からは江戸時代以降の遺物が少量出土した。江戸初期のものと末期のものはあるが、中間がない。これに明治以降の現在に至る遺物が未報告分を含め少量ある。牛乳瓶が出土した。牛乳の容器や蓋はほぼ、ブリキ缶（明治初期）→ガラス瓶導入（明治２２、３年頃）→機械栓（明治３３年以降）→王冠（大正以降）→紙栓径3.41㎝化（昭和９年）と移行したという（汐留地区遺跡調査会１９９６）。久保田遺跡のは大正から昭和初期のものであろう。

〈引用文献〉

佐藤浩司２００１「豊前企救型甕考」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会論集

小柳和宏１９９４「鎮西における居館の出現と展開－豊後大友氏一族を中心として－」『城と館を掘る・読む－古代から中世へ－』山川出版

小野貴史２００１「屋敷の規模からみた大友氏家臣団の階級」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会論集

汐留地区遺跡調査会１９９６「汐留遺跡」汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書

報 告 書 抄 録

ふりがな	くぼたいせき
書名	久保田遺跡
副書名	県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	大分県文化財調査報告第１４６輯
編著者名	高橋　信武
編集機関	大分県教育委員会　文化課
所在地	〒８７０　大分市府内町３丁目10番１号 Tel 097-536-1111(5501)
発行年月日	２００２（平成１４）年３月２９日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くぼたいせき 久保田遺跡	おおいたけんおおいたし 大分県大分市 おおあざけい 大字毛井 あざくぼた 字久保田	３３２		33° 11′ 23″	131° 40′ 30″	20000822 ～ 20001031	2,000㎡	県道鶴崎 大南線 道路改良工事

所収遺跡名	種	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久保田遺跡	包含層	縄文時代晩期		土器	
		古代		土師器	
	集落	室町時代	掘立柱建物跡 井戸 土坑 溝	風炉(茶器)	
		近世～	井戸 土坑		

久保田遺跡
－県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
大分県文化財調査報告書第１４６輯
平成１４（２００２）年３月２９日
編集　大分県教育委員会文化課
発行　大分県教育委員会
〒８７０－００２１
大分市府内町３丁目１０番１号
TEL（０９７）５３６－１１１１
印刷　有限会社 元屋印刷